

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

March. 2022

No. 61



KANTO-GAKUIN × ART



関東学院大学 経営学部・法学部・人間共生学部の学生が 横浜中華街のファン拡大のための企画立案に挑戦

三菱UFJ銀行と横浜中華街のご協力により実施された
第5回K-bizアクティブ・チャレンジ「横浜中華街プロジェクト」。
今後のさらなる展開にも期待が高まっています。

関東学院大学 経営学部は、社会連携教育プラットフォーム「K-biz」を構築し、11社のサポーター企業との協力のもと、学生が実社会で課題と向き合い実行可能なプランを考えていくプロジェクト型教育を推進しています。その最新の取り組みとして実施されたのが「第5回K-bizアクティブ・チャレンジ 横浜中華街プロジェクト」です。これ



唐沢 龍也
関東学院大学 経営学部 経営学科 准教授

はサポーター企業である三菱UFJ銀行・横浜支店の仲介により、横浜中華街発展会協同組合（以下、発展会）とのコラボレーションが実現したものです。担当教員である経営学部経営学科 唐沢龍也准教授に今回のプロジェクトの意義や今後の展開についてお聞きしました。

学生の自由な発想と感性で 横浜中華街の未来を考える

新型コロナウイルスによる外出自粛や時短営業等の行動制限は、年間千九百万人が訪れていた横浜中華街にも大きな影響を与えました。古くからの常連客に支えられた店舗がある一方で、観光客をメインターゲットにしていた店舗は厳しい状況に置かれています。また、リピーターが少ないという課題も浮かび上がってきました。こうした現状を受け、発展会では、客足が戻るのを待つだけではなく、新たな中華街の魅力の創出

と発信に取り組んでいます。今回のプロジェクトでは、発展会が掲げる「リピーター溢れる街・横浜中華街」持続可能社会と経営を実現する横浜中華街へ」というブランドビジョンの具現化に向けて、関東学院大学の学生が横浜中華街の新たなファン層を拡大するための企画提案を行いました。

「発展会は、中華街がゲートウェイとなり、元町、野毛、みなとみらいなど周辺地域と連携して横浜全体を活性化していく構想を持っていて、本プロジェクトでも大きなテーマとなっています。もう一つのテーマがSDGsです。SDGsを推進する横浜市の街として、持続可能な未来の中華街をどう創造していくのか。さらにその先に、未来の横浜市をどう創造していくのか。学生の自由な発想と感性でのアイデアに期待したいとのことでした。経営学部としても、コロナ禍で学生のフィールドワークができない状況が続いていた中で、今回、新たな課題を出していたことに感謝しています」

等へ足を運んでフィールドリサーチやインタビューを行いました。そこで得た情報をもとに企画をまとめ、11月30日の応募締切の時点で計69チームがエントリーしました。そこから一次審査を通過した31チームがさらに企画をブラッシュアップして、今年2月9日に最終プレゼンテーションを実施。優秀な企画に対して賞が授与されます。

「日頃から学生にも話していますが、賞はあくまで結果です。それよりも、仲間と一緒にアイデアを一つに集約して、どう伝えるかを考えるプロセスを楽しんで経験してもらうことが重要と考えています。企業の方々も学生のアイデアをきちんと受け止め、非常に丁寧なフィードバックしてくださいます。時にはビジネスの厳しさを痛感することもあるでしょうが、こうした流れを学生のうちに体験できることがK-bizの良さです」

他大学との連携を視野に 新たなフェーズへ

今回特筆すべきは、最終プレゼンテーションがゴールではないということです。「発展会としては、良い企画については実行していきたいとの方針です。今までのK-bizアクティブ・チャレンジはプラン作成がメインでしたが、ビジネスとして実際に動かしていくことになれば新たな段階に突入することになりますし、その時には多くの学生に参加してほしいですね」

さらに今回の取り組みを第1フェーズとし、来年の横浜・関内キャンパス開設後に

経営学部K-biz

第5回 アクティブ・チャレンジ 2021

関東学院大学 × 株式会社 三菱UFJ銀行 横浜中華街発展会協同組合

経営学部・法学部・人間共生学部

◆テーマ：『横浜中華街のファン拡大のための企画』

参加者大募集!

2023年4月に関東学院大学は関内キャンパスをオープンします。全国的な知名度のある横浜中華街が身近な街になります。今回、三菱UFJ銀行様と横浜中華街発展会協同組合様のご協力を得て、横浜中華街について考える機会をいただきました。学生の視点から横浜中華街の発展に向けたファン拡大の方法を企画・提案して下さい。大学生らしい若い感性と発想でどんどん応募してください。

応募対象

- ・経営学部・法学部・人間共生学部なら誰でも応募可能！
- ・1人でも、複数人でも、各々での応募も大歓迎！

詳細は「経営学部ウェブサイトの特設ページへアクセス！」

応募方法

- ・経営学部K-bizサイト「アクティブ・チャレンジ」で応募書類をダウンロード！
- ・応募書類は指定様式あり。A4サイズ3枚以内。
- ・11月30日（火）15時【厳守】までに①・②の両方を行う！
- ① Formsにエントリー
- ② K-bizメールアドレス（kbiz@kanto-gakuin.ac.jp）へ応募書類を提出（添付して送信）

スケジュール（予定）※ 詳細はK-bizウェブサイトを確認してください

1. 2021年10月13日（水）15:00～	オリエンテーション、応募書類配信等
2. 2021年11月30日（火）15:00 締切	エントリー、応募書類提出
3. 2021年12月15日（水）15:00 頃	1次審査結果発表
4. 2022年 2月 2日（水）15:00 締切	最終報告会用企画書（パワーポイント）提出
5. 2022年 2月 9日（水）	最終報告会 < 時間 / 方法検討中 >

プロジェクト参加者募集ポスター



観光スポット関帝廟もリサーチ



横浜中華街でのフィールドワークの様子

は、他大学との共同実施を第2フェーズとして構想しています。「中華街は既に近隣の大学ともネットワークを構築しています。いずれは横浜を拠点とする複数の大学と連携してプロジェクトを動かしていきたい」と話を進めています。地域振興はどの大学にとっても大きなテーマです。全国的に有名な横浜中華街が近くにあるのですから、私達としてもアセット（資源）をうまく利用していければと思います」様々な連携を視野に入れながら、地域活性化に向けさらにダイナミックに展開していくプロジェクトに今後もご注目ください。

過去のK-bizアクティブ・チャレンジ

- 第1回（2019年）
協力：株式会社モスフードサービス
テーマ：株式会社モスフードサービスと他業種企業のコラボによる新規事業の提案
- 第2回（2020年）
協力：株式会社日テレAX-ON
テーマ：海外に横浜市を紹介する映像企画
- 第3回（2020年）
協力：株式会社毎日新聞・株式会社毎日教育総合研究・日本ニュース時事能力検定協会
テーマ：ニュース時事能力検定を広めるためのプロモーション
- 第4回（2021年）
協力：株式会社電通
テーマ：関東学院大学を舞台とした「大学女子スポーツ」の振興プランの提案

1年生から経営現場の視点を 学べるアクティブ・チャレンジ

本プロジェクトは2019年に新設された「K-bizアクティブ・チャレンジ」というカテゴリで実施されました。「元々、K-bizはゼミ単位で参加する社会連携教育として始動しました。それに対してアクティブ・チャレンジは、1年生から4年生まで経営学部の学生であれば誰でも参加できるコンペティションです。ゼミや学年の枠を超え、時には他学部の学生と組んで挑戦することが可能です。もちろん個人での参加も自由です」

5回目となる今回は、応募対象を経営学部だけでなく、法学部と人間共生学部にも広げました。これは2023年に予定されている横浜・関内キャンパス開設を意識して

のものです。

「経営学部、法学部、人間共生学部コミュニケーション学科が移転する関内と、中華街は非常に至近です。自分達の身近になる地域を活性化するアイデアを考えてみませんか」と参加を呼び掛けました。マーケティングや経営学ではなく、法律や地域活性化の問題、あるいはデザインやコミュニケーションなどを専門領域とする学生の視点からの提案は、経営学部の学生にも刺激になります」昨年10月にオンライン会議システム「Zoom」によるオリエンテーションを実施。その後、学生達は「ホテル建築予定地だった空き地をイベントに活用する」「元町やみなとみらいを訪れる観光客を循環させる」「フードロスの問題や防犯防災について考える」「グルメ以外の新たな魅力を提案する」など、それぞれ仮説や問題意識を持つて、実際に中華街

関東学院大学、日本マクドナルド株式会社、横浜市が「トレイマツトデザインコンテスト」実施

※注¹ 生物多様性を題材としたトレイマツトのコミュニケーションデザインに
人間共生学部 共生デザイン学科の学生達が挑戦し
最優秀賞作品が横浜市内マクドナルド全店で展開されました。

持続可能な食材調達への取り組みを デザインで消費者に訴求

関東学院大学は昨年、日本マクドナルド株式会社、横浜市とともに、『生物多様性を考える行動するプロジェクト「トレイマツトデザインコンテスト」を実施しました。私達の生活は、地球の自然や生物の恩恵を受けて成り立っています。本プロジェクトでは、マクドナルドに来店するお客様に生物多様性を考えていただくきっかけとなるよう、店舗で使用するトレイに敷かれているトレイマツトのコミュニケーションデザインに、人間共生学部共生デザイン学科の学生が挑戦しました。

人間共生学部はコミュニケーションとデザインから課題解決法を考え、より良い共生社会を築いていくことを目指しています。

日本マクドナルドは、いつまでも美味しい食をお届けしたいと願い、可能な限りサステナブルな食材・資材を調達しています。横浜市は、豊かな自然環境の恵みを次世代に繋

げ、自然と人の共生を目指しています。本プロジェクトは三者の思いが一致したことにより実現しました。

※注² 学生達は最初に授業でサステナブル・ラベルの意義やマクドナルドの取り組みについて学んだ上でデザインを考案。出品された計67点から、1次選考を通過した16作品について、昨年8月10日から27日にオンライン投票が行われ、最優秀賞（1作品）、優秀賞（2作品）が決定しました。また、16作品は9月9日から14日まで横浜市役所に展示され、1作品に横浜市環境創造局長賞が授与されました。

表彰式は11月5日に横浜・金沢八景キャンパスにて開催。最優秀賞作品は11



企画意図を学ぶ授業の様子



横浜市役所での作品展示

月3日から約2週間、横浜市内のマクドナルド全店舗にて実際に使用されました。

最優秀賞作品の紹介と受賞者のコメント

最優秀賞作品は、鮮やかな絵柄を背景に、持続可能な未来を考えるマクドナルドの思いと、森林、水産資源、生態系などの保護に配慮していることを示す3つの認証

マーク（サステナブル・ラベル）について紹介しています。デザインした山村実里さん（共生デザイン学科3年）に話をお聞きしました。

「他の人と被らないデザインにしたかったので、イラストではなく、ちぎり絵を作成しました。飲食業界ではあまり使われない寒色系を、あえて使うことで、商品の下に敷かれるトレイマツトに目が行くのではないかと考え、青を基調にしました」

デジタル作画が多い中、手仕事によるち



人間共生学部 共生デザイン学科 3年
山村実里さん（淡野哲ゼミ所属）

ぎり絵は印象的です。「地面の部分にはマクドナルドの紙袋をちぎって使っています」とサステナブルな工夫も施されています。企業の方からは『今、私たちが未来をつくっている。』という言葉と背景がマッチしてわかりやすいとの評価をいただきました。

山村さんは、「学生である自分の作ったものが形になって、店舗で使われているのを見

て嬉しかったです。実際のデザインの仕事はこういう感じなのかなと勉強になりました。このプロジェクトに関わって、自分が買いたい物をする時にも認証マークの有無を確認するようにになりました」と語ります。

今回の実践的なプロジェクトについて、参加した他の学生達からも「幅広い年代のお客様に興味を持ってもらうため、言葉遣い

を工夫してデザインした」「消費者目線で考える力が身についた」といった声が聞かれました。関東学院大学はこれからも社会と連携して課題に取り組む学びを推進していきます。

※注¹ 地球上の生命の繋がりを表現した言葉。

※注² 第三者機関が審査をして、持続可能な原材料調達や環境・社会に配慮した製品であることを示すラベル（認証マーク）。



最優秀賞（3年生 山村実里さん）



優秀賞（3年生 石川真凜さん）



横浜市環境創造局長賞（2年生 植村香乃さん）



1次選考によりオンライン投票に進出した16作品

無印良品 港南台バーズと連携して地域を元気に 園児がエコバッグを作る体験型ワークショップを開催

地域との繋がりを大切にしている関東学院のびのびのば園。多様なネットワークを通じて子ども達の成長を見守る同園の取り組みを、地域連携担当者の声とともに紹介します。

問題について学んだ上で、ゴミを減らす取り組みとして、思い思いに絵を描いてエコバッグ作りを実践。完成したエコバッグは無印良品 港南台バーズ店頭にて展示されました。この企画の実現に至った経緯や内容、今後の展開について、担当者である石井雄輝教官にお話をうかがいました。

地域活性化を軸にコラボが実現

石井教官は2017年よりのば園の地域連携担当として、自治体や子育て関連の会合に参加したり、近隣の商店街や生産者、学校等とコンタクトを取り、園の周知活動と地域の課題把握に努めてきました。

「野庭町を拠点とさせていただく園として、多くの方々とお会いして地域の課題を知ることから始まり、地域のニーズに対して園として何ができるかを常に考えながら活動しています」

無印良品 港南台バーズは関東最大規模の

売場面積を備え、昨年5月にグランドオープンしました。運営する株式会社良品計画は、横浜市と「感じ良い暮らしと社会の実現に向けた包括連携協定書」を締結するなど、地域を活性化していく様々な取り組みを行っています。石井教官はこれまで築いたネットワークを通じて、オープン前から同店と交流を始めていました。

人ひとりが少しでもゴミを減らすためにエコバッグを使う意義について、映像やイラストを使って子ども達に説明しました」

無印良品スタッフも寸劇を披露したり、港南台エリアで展開する移動販売車を通じて地域貢献について紹介。その後、「エコバッグに入れたいもの」をテーマに、子ども達は自由にクレヨンで絵を描きました。楽しくおしゃべりしながら作業は進み、フルーツやおもちや、サッカーボールなど個性あふれる可愛い絵柄のバッグが完成しました。

「子ども達はこれを機に自分のバッグを持てると思う喜んでくれました。コロナウイルスの感染拡大により行動制限のあった時期において、親子が笑顔で楽しめる時間を作れたことは本当に良かったと思います」

親子で楽しく環境問題を考える

のば園で行われたワークショップは、年中クラスを中心に約60組の園児と保護者が参加。密を避けるため20組ずつ3回に分けて実施しました。

「まずは僕がSDGsの観点から、自分達が住む地域や地球が抱える環境問題や、一

展示で広がった笑顔と交流

笑顔の時間はそこで終わりません。ワークショップ後には、地域を元気にする取り組みとして、子ども達の作ったエコバッグを無印良品 港南台バーズ店頭にて一週間展示。横のモニターでは、無印良品スタッフが撮影したワークショップのダイジェスト動画も流されました。園児の家族が来店して展示の前で記念撮影をしたり、スタッフとの交流もあったそうです。

「来店したお客さんも、思わず足を止めて見てくださった。展示を通して、地域の交流や笑顔を増やす取り組みができたことが嬉しかったですね。そして、SDGsに関

わる活動が一つできたことも、僕にとっては大きいことでした。こうした活動をもっと園の内外で推進していきたいです」

無印良品側も非常に喜んでくださり、すぐに第2弾の提案があったそうです。

「早くも2週間後には年長クラスの園児を対象に実施しました。土用の丑の日が近かったので、うなぎをテーマに無印良品スタッフが日本の食文化について説明し、子ども達がうちわに絵を描きました。こちらも大好評で、夏らしいうちのディスプレイが店頭を彩りました。今回はコロナ禍の影響で園児を対象としましたが、今後はブラッシュアップして地域の子ども達にも広げたいと考えています」

今後も様々な企画を推進

のば園では数年前より施設の一部を開放して、食育を通じて地域の子ども達が安心して過ごせる居場所の提供に取り組んできました。しかし、コロナ禍で食事等の提供が難しかったため現在は休止しています。そのため石井教官は形を変えて何かできないかと模索をしてきました。

「無印良品 港南台バーズは〈食〉に特化した店舗で、店内にはキッチンカウンターも備えています。そこで無印良品さんが扱う食材をアレンジして、自宅にいながら親子で簡単に調理体験ができるレシピを作成し、地域に配布する計画を進めています。アレンジレシピは、関東学院大学 栄養学部 細山田洋子教授のゼミに依頼しました」

社会状況を鑑みながら、港南台バーズのキッチンカウンターを使用した調理体験のイベントに園児親子や、地域の子どもたちにも参加を募りたいそうです。また、石井教官は現在、「野庭住宅と野庭団地の未来を考える会」に参加し、市営団地の再生に向けた官民での意見交換も行っています。

「野庭町を良くしていきたいというのが僕の思いです。無印良品さんとの連携した企画も営利ではなく、園の新たな魅力を創出することで地域の活性化に繋がるのではという思いで取り組んでいます。地域に支えられていることを忘れず、信頼を深めて、新しい出会いを探していきたいですね」

新たなチャレンジを続けるのびのびのば園に今後ともご期待ください。



経年劣化したモニュメントをアートとして再生 関東学院大学 美術部が街の美観向上に協力しました

横須賀市との連携事業で
パブリックアート制作

横須賀市にある1万メートルプロムナードは、JR横須賀駅から平成町、馬堀海岸を経て観音崎まで続く約10kmの遊歩道です。そのコース上にあるよこすか海岸通り（小川町交差点〜走水）に点在する複数のモニュメントは、老朽化が目立ち、同市はウォールアート（壁画）として蘇らせる「ストリートキャンパス事業」を進めています。

この事業に関東学院大学的美術部が協力し、横須賀らしさを表現した色彩豊かなアート作品を描いて、街の美観向上に貢献しました。手掛けたのは平成埠頭交差点近くの4壁、両面で計8作品のウォールアートです。うち2作品はペイントで描き、6作品はフィルムに加工して貼付しました。

「心はずむYOKOSUKA」をテーマに、わくわくするような作品を制作してほしいとの横須賀市の意向を受け、関東学院大学社会連携センターが美術部に制作を依頼したのは昨年3月のこと。美術部副部長でプロジェクトリーダーを務めた石川柚乃さん（栄養学部管理栄養学科3年）は「当時は部員が4人だったので本当にで



現地での制作風景とペイント途中の作品

きるのかと少し不安でしたが、新年度になると入部者が急増して15人になりました。新しい人達が多い中で、どうやって信頼関係を築くか、プロジェクト実現のために自分が何をすべきかを常に考えていました」と振り返ります。

部員達は現地に行き、モニュメントの大きさや形を確認してデザインに着手。下絵の提出と修正を何度も行いました。コロナ禍の緊急事態宣言の影響による遅れもあり、最終的に8作品の下絵が決定したのは10月中旬。その後、現地で制作に取り掛かり今年1月末に完成しました。

学部経済学科2年）は、灯台をモチーフにした作品が採用され、高さ1・8m、幅2・8mのモニュメントにペイントを施しました。「1年生の時はリモート授業のため大学にはほとんど来られませんでしたが、絵を描くことは好きで、友達も作りたかったので今年度から入部しました。横須賀らしさを出しつつ、インスタ映えも意識して、色やデザインを考えました」と語ります。

ペイント作業を手伝った太田智也さん（人間共生学部共生デザイン学科2年）は、「小さなキャンパスに描くのは違う



左から國原巧実さん 石川柚乃さん 太田智也さん

面白さがあり、貴重な経験になりました。作業後に皆で近くのバツティングセンターに寄ったり、ご飯を食べたりしたのも楽しかったです。これからも壁画を見れば思い出が蘇ると思います」と話してくれました。この事業にチャレンジして本当に良かったと語る3人。「完成して滅茶苦茶うれしい」（石川さん）という笑顔に達成感が溢れていました。皆様も近くにお越しの際はぜひご観賞ください。

関東学院六浦中学校・高等学校の生徒有志が 歌やダンス、演奏でボランティアDVD制作

新たな奉仕活動で
広がった感謝の輪

関東学院六浦中学校・高等学校では、一昨年からコロナ禍によりボランティア活動が思うように行えない状況が続いています。施設訪問ができない中、「私達に何かできることはないか」と考えた結果、生徒達の様々なパフォーマンスを録画したDVDを各施設に送って観ていただくという有志を募ったところ、

- ・高校3年生女子5人（合唱）
- ・高校3年生音楽クラス（トーンチャイム）
- ・ダンス同好会
- ・吹奏楽部

・SCS（コンピュータークラブ）の生徒達が協力してくれることになりました（学年は現在のもの）。

生徒達は高齢者の皆さんに楽しんでいただくために、歌、演奏、ダンスを披露。一昨年11月から12月に撮影を行い、そのデータをコンピュータークラブの部員が編集して、昨年4月にDVD（約20分）が完成、毎年6月に中学1年生が訪問している8か所の社会福祉施設へお送りしました。すると夏休みが終わった頃、高齢者の方々から生徒達へ感謝のメッセージボードや手紙が届き始めたのです。思いがけな



手作りの感謝のメッセージボードが届いた

い反響に驚くとともに喜びと感謝の輪が広がりました。

友達4人と参加した塚田光来さん（高校3年生）は、『さんぼ（となりのトトロ）』などジブリ作品から2曲を合唱しました。「コロナ禍で奉仕活動ができない中、この呼び掛けを知り、自分で企画するのも良い経験になると思って参加しました。感謝のお手紙を見た日は友達と喜び合いながら帰りました。こういう形で皆と協力して絆を深められ、良い機会になりました」と語ります。

ダンス同好会の秋元万利亜さんと塚越なご美さん（ともに高校1年生）は、3グループに分かれて踊りを披露しました。秋元さんは「高齢者の方に懐かしんでもらえるように1980年頃の歌謡曲に合わせて踊りました。メッセージを見た時はすごく

温かい気持ちになり、将来は人を喜ばせる仕事に就きたいと思いました」と笑顔を見せます。

塚越さんは「ダンスを通してボランティアができて楽しかったです。いただいたメッセージに、孫を思い出したと書いてありました。私は祖父母と一緒に住んでいますが、家族と離れて暮らす方達に、家族を思い出してもらええる気持ちを届けられたことが嬉しかったです」と話してくれました。

企画を呼び掛けた宗教教育部の鈴木由美子教諭は「初めての試みにもかかわらず、それぞれが頑張つて今できる最大限のことをしてくれました。反響には驚いています。生徒達が他者との関わりの中で、相手を思うことで幸せを分かち合う心を育んでくれたなら嬉しく思います」と振り返ります。

制作進行やトーンチャイムの指導を行った音楽科の立田たかね教諭は「メッセージが返ってきた時は、ちゃんと見てくださっているのだなという感動と同時に責任を感じました。相手



後列左から塚田光来さん、秋元万利亜さん、塚越なご美さん
前列左から立田たかね教諭、鈴木由美子教諭

も自分も喜びを感じられるというボランティアの本質を改めて実感し、生徒だけでなく私自身も学ばせていただきました」と話してくださいました。第2弾も検討中で、その際は学校紹介の映像を入れるなどブラッシュアップしていきたいとのことでした。

関東学院六浦中学校・高等学校生物部が「ボラに関する研究」を全国大会で発表

ボラはなぜ跳ねるのか。その解明に取り組む部員達がマリンチャレンジプログラム関東大会を突破して全国大会を目指す様子と研究内容について紹介します。

3回目のチャレンジで 念願の全国大会進出

マリンチャレンジプログラムは、海に関する研究に挑戦する中高生に、研究発表の場を提供する企画です。日本財団と株式会社リパネスの運営により2017年度に始まりました。2021年度は昨年2月に研究内容を申請し、書類選考で採択された40校は4月に認定式(リモート)を行い、研究費助成及びアドバイザーの指導を受けて研究活動を行いました。その後、8月の地方大会で優秀賞に選ばれた15校が新たな助成と指導を受けて研究を続行。今年3月開催の全国大会でその成果を対面(予定)にて発表します。

このプログラムに関東学院六浦中学校・高等学校の生物部が挑戦。「ボラはなぜ跳ねるのか」平潟湾における溶存酸素量との関係」という研究発表により関東大会で優秀賞を受賞し、全国大会に進出しました。2018年度と2019年度にも関東大会

に出場しましたが(昨年度はコロナ禍により不参加)、全国大会の出場権を得たのは今回が初めてです。その内容を紹介するとともに、中心となって研究を進める高校2年生4人にお話を聞きました。



研究の中心となる高校2年生4人
館慧さん(右上)、伊藤正悟さん(右下)、
檀上蒼太さん(左上)、金子翔哉さん(左下)

水中ドローンを手に入れ 未知なる海の世界に接近

良い経験になりました」と振り返ります。発表に向けた資料作成を主に行った檀上蒼太さんは、「収集した膨大な数のデータを検証して、視認できるように表やグラフに落とし込みました。目で見てわかりやすいことを心掛け、質疑応答には想定問答集を作って準備しました」と語ります。夏休みには現在大学1年生となった先輩達が、遠くは静岡や北海道から来校してサポートしてくれたそうです。8月18日にリモートで行われた関東大会では4人がプロジェクターを用いて口頭発表と質疑応答を行い、後輩達は別室でそれを見守りました。審査の末、データのまとめ方が高く評価され、優秀賞となり初の全国大会へ駒を進めました。この快挙に先輩達も「焼肉をおごる」というほど喜んでくれたのだとか。コロナ禍が落ち着いたらぜひ実現したいそうです。

全国大会に向けて研究を続けることとなった生物部。夏休み明けもコロナ禍の影響でなかなか部活動ができなかった一方で、画期的な出来事がありました。水中ドローンの導入です。今回及び前回までに受けた助成金を合わせて購入しました。この水中ドローンで海中の状態やボラの行動を観察するとともに、夏には解明できなかった研究を進めています。「ボラの喉の奥に空洞があつて、そこに空気を溜めて水中での呼吸に活用しているのではないかという仮説があつたので、解剖して体の構造を解き明かしたいです。また、ボラを飼育して、どういう条件で跳ねるのかなど、フィールドワークだけでは調べられないことをさらに追究したいと思います」(館部長)



同プログラムの認定証と関東大会優秀賞の賞状



これが水中ドローン！可動範囲は約100m

釣ったボラは運搬中に弱ってすぐにも死んでしまうことも多いため、飼育数を増やすことも課題です。釣りが好きで、研究のために投網(とあみ)を使うこともあるという伊藤正悟さんは、「潮が引く時を狙って、投網でボラの稚魚を捕ったりしますが、やればやるほどコ

先輩達の研究を受け継ぎ 平潟湾でフィールドワーク

今回の研究は、2019年度の「ボラのジャンプ」打倒寄生虫説」の研究を基に、新たな仮説を立てて臨みました。部長で研究代表者でもある館慧さんは次のように語ります。

「調査を行う平潟湾は複数の河川が流入する閉鎖的な海域です。そのため海水の上に川からの淡水が覆い被さつて、表層は淡水で溶存酸素量が多く、底層は海水で溶存酸素量が低下しているのではないかと考えました。ボラは食性により底層に棲息するため、酸素が欠乏して呼吸のために跳ぶのではないかと仮説を立てました」

部員達は関東大会(8月)に向けてフィールドワークを開始し、表層と底層の溶存酸素量や塩分濃度を測定。また、ボラの跳ね方を海面から「全身が出る」「頭だけ出る」の2種類に分け、それぞれの回数を調査しました。さらに、平潟湾からボラの幼魚を

皆の協力と努力を結集し いざ最終成果発表へ

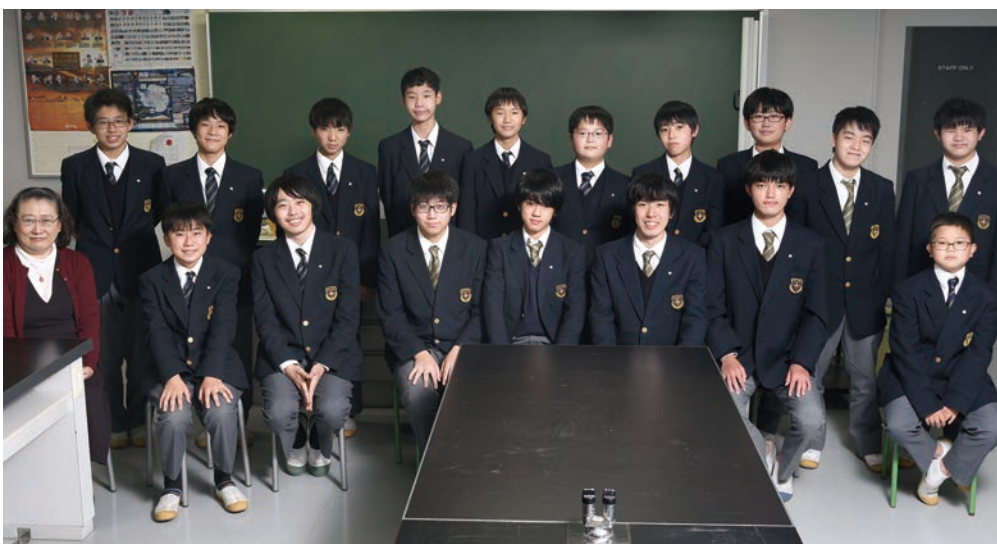
最終成果発表会である「マリンチャレンジプログラム2021全国大会」海と日本PROJECT」は今年3月13日、都内の会場で対面(予定)にて開催。全国から選ばれた15チームが口頭での研究発表を行い、最優秀賞ほか各賞を決定します。生物部顧問の依田聡子教諭は次のように語ります。

「久しぶりの対面での発表になりますが、先輩達も経験を積むことで別人のように成長したので、この4人も3月には立派に発表してくれるだろうと信頼していました。彼らの努力はもちろん、先輩達が築いた土台、後輩達の手伝いがなければできなかった研究です。皆の頑張りの成果だと思います」館部長は「目指すのは最優秀賞。もう1ページ新たな歴史を刻めるように頑張りますので、応援よろしく願います」と意気込みを語ってくれました。結果やいかに。1年間の成果を思う存分発揮してほしいと思います。



フィールドワークの様子

捕って飼育し、様々な条件下で行動の変化を観察しました。その結果、頭だけ出す行動は溶存酸素量が低い時に多く見られたことから、酸素を補うための行動であると考えました。一方、全身ジャンプについては他に理由があると考えられます。飼育による観察では光や振動等に反応することがわかり、現在も検証が続いています。コロナ禍によるリモート授業により部活動ができない時期がありましたが、7月と8月には一気に調査が進みました。夏のフィールドワークは暑さとの戦いでもあります。4人の中で後輩達を率いてフィールドワークを最も行っていた金子翔哉さんは、「1週間連続で平潟湾に行ったり、夏休みになるとほぼ毎日調査をしていました。暑くて大変でしたが、皆がよく手伝ってくれました。普通の学校生活だけでは人前で研究発表する機会はなかなかないので、



生物部の中高部員と顧問の依田聡子教諭。現在25名が所属

令和3年度全国高等学校総合体育大会ヨット競技大会 関東予選3位、本大会12位に

男子レーザーラジアル級で
激戦区関東からインターハイ出場

令和3年度全国高等学校総合体育大会
ヨット競技大会（インターハイ）兼第62回
全国高等学校ヨット選手権大会が、昨年8
月13日～16日に和歌山セーリングセン

ターで開催されました。これに先立ち6月
12日・13日に千葉・稲毛ヨットハーバーで
関東予選大会が行われ、関東学院高等学
校2年生の西村拓真さんがレーザーラジ
アル級（一人乗り）で3位に入賞し、イン
ターハイ出場を果たしました。また、本戦
のインターハイでは全国12位の成績を取
りました。



西村さんがヨットを始め
たのは小学4年生の時。
「父が大学時代にヨットを
やっていて、地域の広報誌
で祖母がみつけたヨットク
ラブの体験教室に行つてみ
ようという話になり、その
まま毎週練習に行くようにな
りました」

みるみる上達した西村さ
んは、中学生の時に日本代
表として世界大会に出場し
た実力の持ち主です。ヨッ
ト部に入部したのは高校生
になってから。現在は部の
中心となつて活躍していま
す。「普段は学校で陸上ト
レーニングやミーティング
を主に行い、日曜日は江の



島の海で練習しています」
コロナ禍により2年ぶりの開催となつ
た今回、レーザーラジアル級で関東地区か
らインターハイに出場できるのは5人。関
東はレベルが高く、西村さんを含めイン
ターハイでも入賞が期待できる選手が6
人いるので、何としても5枠に入りたかつ
たそうです。「ヨット部の卒業生やコーチ、
先生、先輩、後輩など、応援に来てくだ
さった人数が他の選手より多かったのだ
（笑）。絶対に落ちるわけにはいかないと
いうプレッシャーがありました但同时に
力にもなりました」

2日間のレースで初日を3位で終えた
西村さんは、2日目も順位をキープして3
位入賞。見事インターハイ出場を決まし
た。悪天候で迎えたインターハイは、初日
と2日目が強風で全レース中止に。3日目
は小雨の中で3レース実施したものの、最
終日は逆に風が吹かず中止となるなど、自



他艇との激しい攻防

然を相手にするスポーツの厳しさに見舞
われました。結局3レースのみで順位が確
定し、西村さんは出場32人中の12位で大会
を終えました。この結果に西村さんは「6
位入賞を狙っていたので、かなり悔しかつ
たです。練習では調子が良かったので」と
振り返ります。今後の目標は「ヨット部と
しては高校3年生のインターハイと国体
で優勝を目指すこと。個人としては世界選
手権に行くことです」と語ってくれまし
た。

全国高校生男子ボディビル
選手権大会で5位入賞

2021年10月10日、東京都港区・メル
パルクホールで「第16回全国高校生男子
ボディビル選手権大会」が開催され、関東
学院高等学校2年生の栖原星流さんが5
位に入賞しました。40人が出場した今大会
では、まず全員が4つのポーズをとりピッ
クアップ審査によって上位12人に絞られ
ます。その後、規定の7ポーズで競う予選
審査、さらに1分間音楽に合わせて自由に
ポーズをとる決勝を経て順位が決められ
ました。



この大会は高校生ボディビルダーに
とつて最大の目標であり、栖原さんも高校
生になったら出場しようと決めていまし
た。しかし、高校1年生だった昨年度はコ
ロナ禍で中止となったため今回が初出場。
人生初となる大会で見事入賞を果たしま
した。5位という結果については「嬉しい
反面、正直、悔しい思いもあります。今の
自分のレベルを知ることができたので、す
ごく良い経験になりました」と語ります。
本格的にボディビルを始めたのは中学
3年生の時。「元々はサッカーをやつてい
て、足が速くなりたくて筋トレを始めまし
た。テレビでボディビルの選手を見てかっ
こいいなと思う、本格的に取り組むようにな
りました」

その時に見た憧れの相澤隼人選手には大
会当日会うことができたものの、緊張して
全く喋れなかつたそうです。

ボディビルダーは大会に向けて数か月
かけて体を仕上げていきます。「僕の場合
は12キロ程度の減量が必要なので、ト
レーニングと食事によって5か月間で計
画的に体を絞っていました」

体脂肪を減らしながら筋肉量を維持する
ために急激な減量は禁物です。数か月に
わたる食事管理には家族の協力も欠かせ
ません。「母にはああして、こうしてとい
ろいろ頼んじやいますね。きつと大変だ
と思います」

ちなみに取材時は既に体重が10キロほど
戻った状態だそうで、いかにストイック
な競技かがうかがえます。

トレーニングは自分自身との孤独な戦



いですが、今はSNSを通じて同世代のボ
ディビルダー達と繋がって情報交換など
も行える時代。皆で高みを目指しているよ
うです。高校生ボディビルダーのレベルは
年々上がっている中、これからも突き詰め
ていきたいという栖原さん。得意なポーズ
は「ラットスプレッド」という肩や背中の
筋肉を強調するポーズです。高校生として
最後の挑戦となる今回は「優勝を狙
う」とのこと。弱点である胸を鍛えて、体
の厚みの改善を図っていくそうです。

大会が終わった後、最初に何を食べたい
かと尋ねたところ「甘いもの、特にドーナ
ツが好きなんです」と意外な一面も。数か
月我慢した末に食べるドーナツの味はど
んなにおいしいことでしょう。栖原さんの
さらなる飛躍に期待しています。

学院内の個性あふれる人をクローズアップ！

ボディビルに青春を懸ける高校生を紹介します

関東学院中学校高等学校
栖原 星流 さん（高2）

藤竜也さんは関東学院中学校高等学校の卒業生で、現在は横浜市にお住まいです。80代を迎え今も第一線で活躍する藤さんに当時の思い出や近況をお聞きしました。

戦後復興期に関東学院へ

僕が子どもの頃の横浜は、敗戦の傷跡がまだ色濃く残り、伊勢佐木町あたりに遊びに行くとき焼酎跡にテントを張って営業する露店が並んでいました。尾羽うち枯らした（落ちぶれた）ような姿の日本の男達と、カーキのズボンに白いTシャツを着て颯爽とした米兵とのコントラストは子ども心にも感ずるものがありましたね。そこからすごい勢いで街が復興していく様をつぶさに見てきました。

親族に牧師などキリスト教関係者が多くいたこともあって、中高6年間を関東学院で過ごしました。楽しかったですよ。校舎（当時）がロマンティックで、丘を登っていくと古色蒼然たるお城のような感じですね。どこか外国っぽい、オープンな雰囲気がありました。中学生の頃は結構勉強して、3年生の時には生徒会長を務めました。当時は活発な子どもでした。戦後の混乱期、7歳の時に父を事故で亡くしたこともあり、僕は小学校を5回も転校しているんです。だから鼻柱が強くないと生きていけなかったし、自分の意見をバンバン述べる子どもでした。

それが高校生になったらバタツと勉強しなくなつて。小説や映画に夢中になり、友達と遊び回つて、よく卒業することができたと思うくらいです（笑）。当時は礼



俳優

藤 竜也 さん

1941年生まれ。本名：伊藤龍也。関東学院中学校高等学校卒業。日本大学芸術学部演劇学科在学中（のちに中退）にスカウトされ、1962年スクリーンデビュー。数々の映画やドラマで活躍中。

コロナ禍で臨む撮影

同級生とは今も付き合いがありますが、コロナ禍でなかなか会えないですね。落ち着いた頃に誘いがあつたけど、収録や撮影に穴を開けるのが怖いのでお断りせざるを得なくて。やはり責任がありますからね。

長く俳優の仕事をしていますが、こういう経験は初めてです。一昨年10月から昨年9月までNHK連続テレビ小説「おかえりモネ」の撮影に参加しましたが、常に感染に気をつけながら、なんとか無事に終えることができました。最初にオフアを受けた時、年齢や家族のことも含めて、本当に乗り切れるだろうかと心配でした。そこで、自分の一番好きなものをやめて願掛けをしようと、それまで一日3箱吸っていたタバコをやめました。今も禁煙は続いているんですよ。

◇

今年がデビュー60周年となる藤竜也さん。「おかえりモネ」のあとに映画を1本撮り終え、年内さらに2本ほど映画撮影に参加予定だそうです。これからもご活躍を楽しみにしています。

心に残るエピソード

拝の時間があまり好きではなくて、先生からすると、何かと扱いにくい生徒だったかもしれないですね。ちやうど若者の政治的なムーブメントが起きていた時代性にも感化されたんでしょうね。でも、当時は聞き流していたつもりでいた礼拝での先生や牧師さんの言葉が、今でも心のどこかに残っていて、やっぱり影響を受けているんだなと感じます。

よく憶えているのは、中学の英語の先生が日系アメリカ人で、僕らを「Gentleman」と呼ぶんです。少年に対しても敬意を示すアプローチの仕方は、不思議なときめきと同時に、ある意味、ブレッ

海外を視野に日本の粋を発信

現在29歳の宇野さんは大学時代から起業に関心を持ち、栄養学を学んで資格を取得するとともに、経営関連の授業も積極的に受講していました。また、居酒屋で4年間アルバイトをして調理師免許を取得しています。卒業後は国内外で飲食店を経営する企業に入社し、海外勤務も経験。新たな領域に挑戦するため外資系の大手IT企業への転職を経て、満を持して一昨年初、会社を設立しました。

「今一緒に働いているのも栄養学部で出会った仲間達です。充実した大学生活がなければ、こうした縁もなかったと思います。ここまで多くの人に支えられてきたことに感謝しています」

関東学院の関係者や友人も足を運んでくれるそうです。そんなうまみやは昨年10月に東京・表参道店をオープンしました。

「これまでの経験を活かして、将来的には世界へ事業展開していきたいですね。地域にしっかり根を付けて皆様のご支援をいただきながら、このビジネスを大きくしていきたいと思います」



関東学院の卒業生が経営に携わるお店を訪ねました。至福の30分を提供するおでんバーをご紹介します。

関東学院ネットワーク

O'denbar うまみや 関内店

住所／神奈川県横浜市中区常盤町2-12 ウェルス関内 B1F
☎／045-232-4574
〔営業時間〕11:30～14:00、16:00～23:00
〔定休日〕年中無休（不定休あり）
〔アクセス〕関内駅（JR/横浜市営地下鉄）より徒歩2分
※テイクアウト、デリバリーも対応しています。
※新型コロナウイルス感染防止対策に取り組んでいます。
なお、感染状況により営業時間を変更および休業する場合がございます。
最新情報はお電話やInstagramでご確認ください。



本格おでんが100円で味わえる

関内駅（JR/横浜市営地下鉄）から徒歩2分。お出汁（だし）の香りが漂うビルの階段をおりれば、隠れ家のように佇む「O'denbar（おでんバー）うまみや」があります。経営者の宇野優司さんは関東学院大学栄養学部の卒業生です。宇野さんは「日本の伝統文化を世界に発信したい」との思いから会社を立ち上げ、昨年2月に同店をオープンしました。

「日本食は今や世界中で認められ、2013年には“和食；日本人の伝統的な食文化”がユネスコ世界無形文化遺産に登録されています。そんな日本の食文化を代表するお出汁のうま味を極めるにはおでんが最適だと思い、おでん屋を始めました」

大阪の老舗問屋から北海道産の天然昆布を直接買い付け、丁寧に取ったお出汁。そのうま味をたっぷり含ませ素材の魅力を引き出したおでん種は、ほとんどが税込100



ランチタイムにはカレーライスが人気

円という嬉しい価格です。グラス生ビールは200円、全国各地の日本酒は400円から取り揃えています。日本酒を温かいお出汁で割った「出し割り」（400円）も人気商品です。安くて切りの良い価格帯には理由があります。

「日本の伝統文化であるうま味を、より多くの人に味わっていただきたいのが一つ。そして、ふらっと寄って楽しんだら、サッと会計を済ませて出られる、そんな粋な店でありたいという思いがあります」

牛すじなど一部のおでん種は200円。おばんざいは300円から500円。お出汁をベースにしたカレーライスや丼物も好評で、昼にはランチとして提供しています。最大15席ほどの店内に日本文化の粋を凝縮したうまみや。一人でも立ち寄りやすく、カウンターで店員との会話や食事を楽しむ姿も珍しくありません。

「お一人様から、少人数のささやかな宴まで、短時間でも低単価で日本の魅力をたっぷり楽しめる“至福の30分”を提供します」

#KGU_RESEARCHERS

研究者たちが今考えていること。



Currently released



2021年10月より、関東学院大学は「#KGU_RESEARCHERS」をYoutubeに公開しています。「#KGU_RESEARCHERS」は研究者へのインタビューを通じて、現在進行している研究活動や、これまでの研究成果、それらから得られた知見、研究を進める上での苦悩や壁、喜びなど、研究者たちが今、何を考えながら研究に取り組んでいるのか、その思考に触れる動画企画となっています。小山巖也学長がインタビュアーとなって、様々な分野の研究者たちに登場して頂き、研究の「リアル」に迫ります。QRコードより是非ご覧ください。

